

31

## 治癒神としてのカナヤマサマ

—八丈島での事例から—

土屋 久

順天堂大学公衆衛生学教室

八丈島は、伊豆諸島の南端に位置する島である。東京から南に287km、現在では、一日3便の飛行機と1便の船とにより本土と結ばれているが、かつては三宅島と八丈島との間を流れる黒潮に阻まれ、渡島することの難しい島であった。そのため、本土の影響をうけつつも、独特な民俗慣行が形成された地である。

本稿では、この八丈島の民俗神であるカナヤマサマの治癒神としての側面について、報告と若干の考察をおこなうものである。

カナヤマサマは、鍛冶屋のカミ、火のカミとして広く知られる民俗神である。この点は八丈島でも同じであるが、島では、力の強いカミ、荒ぶるカミとして畏れられ、人を呪詛する際、祈願の対象となるカミでもある。それと同時に、八丈島の屋敷地には、「金山様」という文字を彫り込んだ小祠が病氣直しの祈願のために祀ってある場合も多々みられるのである。このように八丈島でのカナヤマサマには両義的な面がみられるわけであるが、カナヤマサマの治癒神としての側面については、今日までほとんど報告がなされたことがない。そこで、本発表ではまず、治癒神としてのカナヤマサマ祭祀について、八丈島での実態報告をおこないたい。次に、カナヤマサマの一般的な性格に、治癒神としての性格が付与されるに至った過程を、ミコの活動を中心に考察する。

八丈島では、平成14年に96歳のミコが亡くなって以来、表立って巫業に携わる者は今日に至るまでいない。しかし、かつて八丈島には多くのミコが存在し、巫俗が盛んであった。彼女（彼ら）の活動は、当該地域の病氣観や治癒に至る観念の形成等を理解する上で不可欠のものであり、カナヤマサマの性格形成にも大きく寄与していると考えられる。

ところで、医療人類学者の池田光穂は、治癒神を問うことの意味を、『医療と神々—医療人類学のすずめ—』の中で、以下のように指摘している。

治癒神には、〈ひとが病になること〉、すなわち病者、治療者、家族、共同体、病いに関する信念、あるいはこころの安寧、治癒の源泉など、およそ人々が考える健康についての観念が凝縮されているのだと言っても過言ではない。（中略）世界のいろいろな治癒神への関心を強調することは、健康にまつわる豊かなイメージを取り戻すうえでも重要なことと思われる。

この池田の発言になぞらえていうならば、治癒神カナヤマサマには八丈島における健康についての観念が凝縮されているといえよう。

今後の研究の方向性として、本発表の最後に、当該地域における「民俗治癒論」等を展開するための方向性について一言する予定である。